

## 古い病院の新しい取り組み

8月に入り暑い日が続いているが、毎年この時期になると水不足や電力不足が話題となる。子供達の夏の思い出作りにこれらが影響しないことを願うばかりだが、今年の夏はどうだろうか。

足りないものと言えば、全国的な医師不足が社会問題となっている。正確には勤務医不足のことだが、私の勤務する病院でも数年前に極端な医師不足となり、患者数が激減して経営不振となった。

私共の病院は昭和4年に宇都宮市立療養所（後に国立へ移行）として設立され、平成5年には2つの国立療養所が1つに統合し来年で創立80年を迎える。人工関節手術で有名な整形外科や結核、重症心身障害医療など、これまでは慢性疾患が中心であった。

病院再建のために地域の医療ニーズや病院の将来像を検討し、2年前から「病院改革プロジェクト」と題して職員の意識改革と経営改革に取り組んでいる。具体的には、職員1人ひとりが職場での自分の役割と地域における病院の役割を自覚して行動するとともに、地域から要望の大きかった救急医療にも対応してきた。

元来が総合病院ではないためすべての救急は受けられず、職員配置も旧療養所体制を変更できない状況ではあったが、「できる範囲で地域医療に貢献しよう」と職員が一丸となり、不採算を覚悟の上で努力してきた。これまでの所では病床利用率も上がり経営状況も大幅に改善して来たが、医療の質の向上や医療安全の推進など課題も多く、病院改革は今後も継続しなければならない。

最近になって国も医師の絶対数不足を認め、医師増員を決めた。医師が増えて勤務医の過重労働が少しでも軽減されるのはうれしいが、医学生の選抜には学力だけでなく適性も十分考慮して欲しい。患者

と接するのが苦手な医師では患者にとって困るだけでなく、医師本人にとっても切実な問題である。「料理のきれいな人間がコックの修行をするようなものだ」と言う大学教授もいた。

さらには、医学部卒業後の臨床研修体制の整備・充実も大切だ。医師として本当に必要なものを身につけるのは、教室ではなく医療の現場に出てからなのだから。

学校で僕らが学ぶもっとも重要なことは、「もっとも重要なことは学校では学べない」という真理である（村上春樹）。

医療を支えるのは高額な医療機器ではなくそこで働く人間であり、その人間は現場で育てられることをいま改めて実感している。

（2008年8月4日 下野新聞「しもつけ随想」）